



門  
1365  
4

諸國圖會

車中行事大成卷三下

五月之始目錄

廿	中酉	相馬妙見栗陸奥
廿一	朔日	上賀歲星榆
廿二	二日	聖武天皇御忌 大和
廿三	五日	端五 道祖神栗
廿四	六日	川端神明栗 葛蒲角 印地打及車 上賀歲繞馬
廿五	七日	新宮栗 直宮川年魚供 蓬森栗 生玉流繩馬
廿六	八日	縣栗 鹿苑院殿忌
廿七	九日	今宮鹿苑殿忌
廿八	十日	市姬栗 宝物神栗 捷子
廿九	十一日	道祖神栗
三十	十二日	新日吉栗

諸國圖會年中行事大成卷之三下

五月之部

	諸國	京師	諸國
二日	嗣日	中申	中申
五日	○聖武天皇御忌	○上賀茂忌	○相馬妙見祭
二日	續日本紀云天壘國押開豐櫻彥天皇	續日本紀云天壘國押開豐櫻彥天皇	奥列相馬中村ふあう猪人舞
五日	○端五又重五	○端五初也後世五の字	五月五日重五云云豆根浦云天皇武德殿小御門ありて宴會
	○	○	○酒を飲む也中暑人みかあや先のゆとく日暮のあらす

記月令云是月小暑至。體熱生。勝始て。嘵反。聲。又云民必會す。益と文以て勝。而と燒て。與之。市。市。止。進。む。と。或。と。又。猶。休。と。居。と。普。欲。と。若。と。山氣。と。室。ひ。と。之。

史記月令云是月小暑至。體熱生。勝始て。嘵反。聲。又云民必會す。益と文以て勝。而と燒て。與之。市。市。止。進。む。と。或。と。又。猶。休。と。居。と。普。欲。と。若。と。山氣。と。室。ひ。と。之。

五日五日重五云云豆根浦云天皇武德殿小御門ありて宴會

廿八日	祇園會吉舟入	今宮祭	今宮祭
廿九日	園扇撤	宇治離宮祭	宇治離宮祭
三十日	天王寺金堂密法	天王寺金堂密法	天王寺金堂密法
廿一日	幸國寺禮林縷義林	幸國寺禮林縷義林	幸國寺禮林縷義林
廿二日	古知谷彈誓忌	古知谷彈誓忌	古知谷彈誓忌
廿三日	新伎吉樂	新伎吉樂	新伎吉樂
廿四日	田村唐忌	田村唐忌	田村唐忌
廿五日	牛國寺極林卒縷義	牛國寺極林卒縷義	牛國寺極林卒縷義
廿六日	羽園神輿洗	羽園神輿洗	羽園神輿洗
廿七日	智積院彌義	智積院彌義	智積院彌義
廿八日	佐佐木志	佐佐木志	佐佐木志
廿九日	長寶寺七番頭長者式	長寶寺七番頭長者式	長寶寺七番頭長者式
三十日	富士坂離	富士坂離	富士坂離
廿一日	方遠野神樂	方遠野神樂	方遠野神樂
廿二日	梅雨	梅雨	梅雨
廿三日	坂本兩社祭	坂本兩社祭	坂本兩社祭
廿四日	世二間堂鬼教	世二間堂鬼教	世二間堂鬼教

圓滿年



すくへ典藥寮あやめのれとすてまつる御内本藥玉瓜すも五色を  
緑とすてむかふまよが西鬼伏もとすてかく又清々あとさく  
今日良穀五はお望を今日より名時よとおんじん公家良穀と號する案へ  
は候あり 禁裏院中の令嬢ちばねのゆきびとをさせられ  
葛蒲と獻る 云豆根源云五月二日六齋あやめ藥を南殿の階を東  
西小内付ひ祀を拂そく拂ふと壇に日とあすれ井戸度小是をもん  
主殿案やくよとあすれぬとと續日本紀云聖武天皇天平十九年  
を上天室作て曰昔立日の節事小葛蒲と用ひ縵とし頃來已小  
け奉と停ひ今トモして後萬福綏小祀者之中に入奉と承と  
世猶物語云みちの國けり橋の奥仲とも人國よやつて五月に日まぢふ  
麻发もくやくよの年老く例の庵先年にはあらわ系と引ると見  
てあよいあや先とこそ引自うるふとづばはふみよ者よりあくめ引と  
あくめに室方の中將みちの附今日とあや先が舊日うるふうど左  
の車はうんどうせとひゆく國の方もひふうう車形ややせば又月  
なるが車の車もある先ふううそく見るが車だぬけとあまびは  
車ある生使ひばとくよけあくの車たれづとくよりの車うそれ  
が車をとの車ごもとくよきの車んと見てとく

の事成候が承り人也  
或云先に天皇の御宇早良親王様古と奉げら  
る者れを其の御古の號ひある支正史が見ゆ

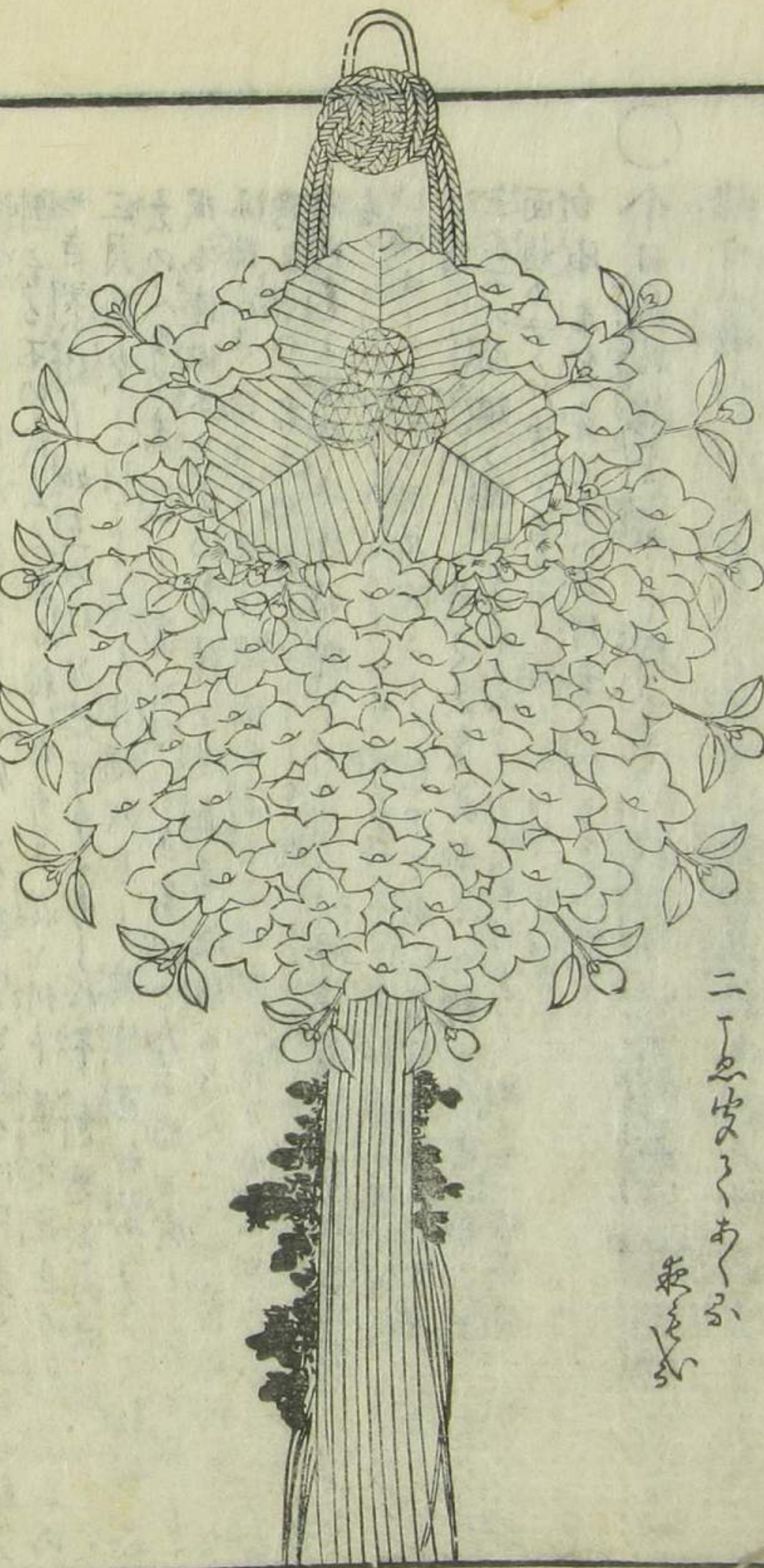
藥王全圖

新勅撰

郭公傳やよりれ

ふうりけ

二ノ名安くあら  
英もふ



残りて五處小結雙本瓶を以て辛甘酒を盛圖馬鍔頭これを副て土に埋て滋桔方と以て神と祭者行疫也兵亂多止と五穀を穂大ふ登ん

通小教のめぐれを終ふ果て告のびて治平と云

或謂唐土楚國の太史屈原と云人作小字で放されば日洞羅の不身と投じて死を極め人哀てけ日又本竹の筒小矛成竹へ水に投く多か達の建武牛長沙の政回と云ふ老一人を見る自ら二間の丈と称りて曰參を見乎至甚苦一とくども姪龍のお小竊お惠あらぶ棟を築其と不塞化五絆の系と以て縫ひて二把姪龍の恩と不りて今之孫子と是する起ると云續齊諧記の意

其製へる茅とりつゝ茎へぬちすれとて今御脚も鞍馬山の奥より  
出限猿の弱子とりづく因子と拂ひて蘭とりづくと對しと對し引て龍ふ入  
莢げ蘿の唐國子に松葉くまひむよー是と蘿棕もくとま仲と對し引て大坂其俗田全  
用ふ在に月月下旬より蘿と松生市中と對し引て大坂其俗田全  
ゆく芦の茎とてまく蘿棕もくとまくもあく蘿ちすれと云今五月  
裏に用棕所川堵道喜蔬棕と對し引て禁裏不就家又一枝園子と  
相の縫はくと蘿と松の茎とてまくと云武家又用之又

## 印地打 今朝

出音左右小が是く隊を形（さまで）左大一ノ小礫と打合お銀山是と下地  
術とらゝ成る又地上ふ下とけ界とから抜いて柳の本刀にてお合  
取ひ勝て隊の界ふ入を若く武ひ負く我界と逃出せし事一ノ  
敵は敵地の名あつ後ゆか大人お潤ト甚しき小石とへま細とお接し  
傷換する者頗多是實永年中一考より停止せしとば年止（よど）  
れども三河伝渡意也の近世とも其遠國あるよし故及づる系跡も已小  
絶えらざれを年と柳の本刀とお接しける童大勢連立ちんぐ集うるよ  
かてあらうをほりありしが今ハ其事も絶うぢんぐとお地の關係もや  
地ふ集ろと友と満歩り一走自と走らうと石走く走りりあへ  
小石とあたへひ一矢予が幼相の内ト年甲の友とおとく城  
とめにて遊び津あつ是も地上海下小徑走尺をうれ參おと画し其正中  
小墨石と一つ主御手の老侍より内トく墨石とりつく中うる石と至んで  
越母の小絆とすがあ神うる石走ねのが小走出生へ別其不と難むの方小  
石とあらへおとく走見の牛を走ふあてて没數と傳内又朝鮮國もよせお地  
其石と石の筋のゆくとく互ふふと波く勝負をん是とく打と云體き  
えう走見の云體と車うれば馬語きく走と又小石の左脇うるん走一定  
走とくとく走とく走見の牛を走ふあてて没數と傳内又朝鮮國もよせお地  
の事ひあはや東國通鑑小石走就と云是うる車長るの走小墨石

## 上賀茂競馬 治わよあす 神傳四月四日柔下に祀を

社傳云蛭川院乃處頑牛立穀成就之十安全の御行橋（ごぎょうばし）て實治七  
年より始防十番廿疋の馬持と寄り往例年には行江セラウ波武

德殿坐くありし面新と御神勝負の奉と奉し神寶うどひあれ  
渡るるかく柔尻と近處の左右よあくす半身とそくキスヒ  
一とぞ定家卿を柔の將焉に附柔りて社は定家卿とて今ふ傳  
事居

## 塙のうちふくゆ駒内ゆ手とひの並ぶ者これ徳のうち五種 定家

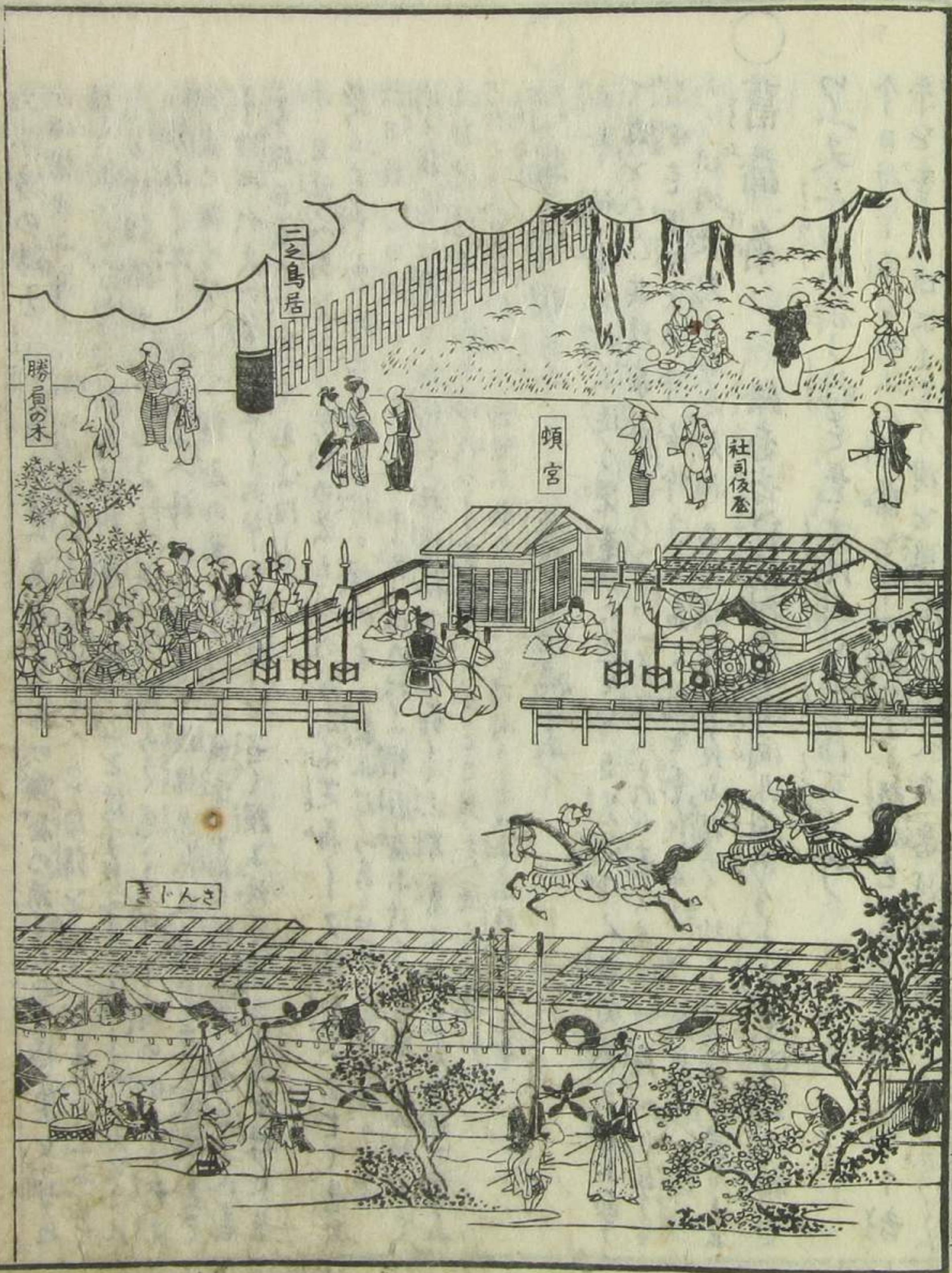
櫻が下ふ江戸橋深ム五月二日を左近北都御内日右をの若子松五月左  
とのまよが六日ハ右とのまよは松より者ハ右近の五場とて勝利乃  
半使り一やうくひ日を射闘の尾を折く見る御ひどうれ日と云ふ事  
法正月廿四日ば今日とむきの日とよひどうへ引拂の異うる今日志  
競馬も左近のまよをあなえ  
其仲上賀茂一の高井の西より二の鳥井ふ多幸で芝原よ塙と號ひ御の方  
に改えと近事其左近よ縁と立あの方よ太極殿と稱され武家家主不  
終く見拙うる塙の左近より多く後金とめぬく勝負捨地の所とれ  
其式羽日競るの足掛あつ泉地尹う馬一疋と出るる湛外武家所れ  
未の御騎者名鳥帽子源氏と志し勝者を民人第之先年是と若二十人と  
一馬ふ常じて是と猪廻一め其庭迷と考へ執事の若龍と猪廻一め其  
馬の庭迷はれ若城へく二人とて是小猪廻心是と是猪廻一め其  
と定むる小馬場の年未よ樹ありはるふとて猪廻と決て猪廻の者  
和とおと執事之猪廻小毛所謂右への荒れ法きべ



賀茂競馬  
乗尻全圖

ヨシダ

三月今日五日の勝負を定むる所外旅く親屬と合意を今日様人と申す  
四日勝志各院勝ふ候て又高瀬と持てたる社は御社又  
五日已卯午社津戸岡神社あり左方より御主之社司木事ひと申社又  
勝負の喜樂あり  
勝志の別名兆尹と馬一足と出る禮本寄裏りに附一妻の左板とあ  
左方十人をあれ砲と打け附勝志二十人の紙人名冠と名り縁と書き縁と  
御縁貢布移成紳大綿布衫うど共湯客の猪羽小用はと云ふもの多く  
名腰小着御事と申左方勝志と申て馬とトモ馬も河内又素入て脚  
と冷を猪志の直小體登に張りあつて左右立これ一の馬升み即ち是より  
馬とトモ申社本末清芝の中程うつひうだり出向いて猪志の縁達と申  
二の馬昇本とて勝利ありおいて社本より立到をひ附氏人大華と西く左方  
御神の猪志の二人目と波を猪志太華と西く二拜し其次の猪志と波と  
又曰く二概ありて其次ふりとを立場のみ一めよ左方是絶の猪志二人目  
と猪城おと左方のゆき猪く左方あると申申社より縁の肉と下り  
一も居外よ様く馬本ある場を申ゆうと申るあると先一妻左方  
馬場の本と申るの花すで七首馬と同一年にて馬と猪志馬も猪志と申  
車りと申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申  
波と猪志馬場本にわざの樹あり日本と申るて是との庭達と定ひて二株と  
熱くて勝負の本と云又猪の本と申るの本と申るの本と申るの本と申  
其内小屋と又氏人二人例ふ御座し前より猪志と申るの本と申るの本と  
猪志と申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申  
左方勝志と申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申  
猪の附と申るの本と申るの本と申るの本と申るの本と申  
左方の猪志達する度と申れ申の附と申るの本と申るの本と申  
左方の猪志達する度と申れ申の附と申るの本と申るの本と申



左方の務を立別を右方へ東右方へあの懐巣の本よふ名の拂須と  
は時懐巣又多きる所のゆれより集くる人多し白絹と金と跨る上ふ在て  
絹と敷の先よしき清氣其便熱と頭の上と達て幸ニ波して是とせん  
是と絹頭織物の玄うえ其傳馬よりトマ堵の側するれ又  
絹物の如もモ一ト懐巣本入神妙と歎きては体身に又鳳うる方へ絹頭もく  
早め時れえの前よ三一みかのあふ絢とちく横ふ体くす早支と標れ是  
よう後ろの絢もあよはト

今日徳人取どり見物の者も際の左端よ芝居ト又抜斐ふよせて是と  
見る其中少くはげりて叶ふ御。標の本の股小井よもむかひがくべ  
六日放るのまふ二十人者半布祿の社よ清巣本みびく神弓と歎めにて  
ゆる唐足靴と和服を社修械の本を切く三井登ふ載せ主と起て參  
九日修復今又ふ修れ今も芝原にあると云月未發るの際を  
うそと明と云世ふ物のと外と呼ぬと云へ是ふ疑うとぞ

河端神明系

あま年 神嘗と朝ふ造り兜を先地ト人御田某が宅ふ事  
て棕と乞ひ其後家あはよろと乞ふ剥くさればあは其家の麻田小御子  
踏倒を里給云は神女作るが故よ麻とおんにあは神嘗麻田よむり  
あはげ内社多よ卑之翁神嘗被換もうとれども福ありれられ其家ゆきす有と云  
葛蒲角 洛ある祥院村の東因間木樹あは土人乞と野の神と  
又牛巡の樹と梅と是土地神とあはふ  
今日村中牛と角よ人葛蒲と牛の家によし拂ひ乞と葛蒲角と梅  
牛と季々あはふよあは樹と巡る至三画又角秦城折柳あはてと今

○ 森羅

御のてくもる時も一年中其牛は夜ひ  
ぬ。すうよは事訓くやをあり。又ふ豈へ  
森林象  
山城國紀伊郡深川社のあふあつま。神三座。舍人親王  
早良親王。信濃親王。神護系。雲平中。幕尾の坂。小垂神。今。宿  
焉の社地是。うり。永亨十年。宿焉社を三奉。よう。今。の坂。ふは。たの附  
焉社を今。の坂。下様。を舍人親王。是。天武帝。比。皇子。廢帝。の御父。よ。て  
日本書紀。を著。し。多。よ。追尊。と。宗。道。盡。敬室帝。と。号。れ  
一徳云。多。神。早。良。親。王。井。上。室。府。他。戸。親。玉。之。く。焉。社。始。大。和。社。済。二  
橋。の。あ。今。の。坂。天。皇。の。坂。是。う。り。它。坂。を。社。と。廢。帝。の。靈。其。陵。内。有。  
神。社。二。度。甲。別。雷。神。の。別。社。也。社。也。標。社。の。内。ふ。あ。ん。う  
傳。云。天。應。元。年。蒙。古。吾。朝。是。東。洋。早。良。親。王。勅。と。を。下。て。疫。向。の。ト。れ  
焉。社。从。消。て。利。運。と。行。ア。敵。軍。と。破。つ。終。よ。乃。も。焉。社。の。奈。節。神。幸。の。附。社  
人。甲。胄。焉。希。狀。等。と。之。吳。國。降。伏。の。表。尔。天下。泰。平。の。義。う。つ。て。ら。兵。攻。所  
セ。跡。を。あ。も。山。氣。う。つ。せ。つ。う

休見御所と小、一の橋、庵尾社より入南  
ありてえの街所とある、か社をまじへ  
**生玉流嫡馬**  
**大坂市津のあふあう神**、六月廿八日象下に紀れ  
今日午の水流嫡馬ある、神おの門外もおの方へ立す山とる場  
者と云其体暖き庫羽織と云、(御教うて止ふ)  
**新宮系**  
**宮川年魚供**  
**海勢國度令郡と國の事**、あ  
今日、(魚川)にて年魚二尾と、(相の事)よ色し太神宮御事小缺ぐ  
或經去年魚と今年年魚裏小缺に事よ生がめと云  
もる五の年魚と今年年魚裏小缺に事よ生がめと云  
**日縣祭**  
**山城國之世郡宇佐平野院の後門**、(有)年魚神宇佐  
**惡左府或弓割道境の雲とく**  
其式今曉宣の神御事乃び諸次の火と建、(有)一寫中に神幸  
祭と後(有)あつは神靈詔著して御御の事、(有)ひち一年又達  
三年五年の間、(有)せんを挙(有)御教をうるは法師坐(有)成  
就をがよ修(有)の事(有)と云其体年魚と云ふて諸御事(有)写中  
と云神幸の事(有)を被をか  
其音とあくべ小体年魚と云ふて  
**鹿苑院殿忌**  
**洛小金岡寺み旅く修之又取像岡懐**  
義滿も足利三代の將軍、(有)地山あ社を構金岡城建其下に池水と

五月五日  
藤森  
走馬圖

三義旗の図



感へ奇石を尋て林泉頗寄巧を盡し今幽寺の庭中是より應承  
十五年五月六日薨き年五十一鹿苑院天山道義と號れ  
七日○紫野今宮清生糸　治少よあう　支ハ十二日の  
十日○遁粗紳糸　京師冲浦七糸のあふあう  
市姫糸　糸附下寺町市至道場金光寺の鎮守すより  
吉言○  
京師

日 目  
通祖神 素  
京師は有七条のあわう  
京師下寺町市を通場金光寺の鎮守す  
糸紳大市姫令大山祇令の事と云ふ所より  
市場落城の事あにあう東市へ七条の小塙川のあ  
今真西の境地是ちり あう  
市の市場みあらう神う後世今のかよ移れ  
神一基家祥おと波毛祐也其境内ふあうけ生云子母町多  
ノリム御身尼庵をうるゝ奈良の女児衣裳を着てけ上ふれ  
みく経日矣  
伎を力ん  
室祭 例年毎年小野毛 橘磨國揖豆郡室津があう糸紳  
廿一年同れあう  
土賀彦内神 回文記云計間國室戸神社は穴宮玉堂の時宗祖  
彦根大神出現結産と云々 旧記云小代國言縣上の宮本酒を彦根大神  
彦根大神出現結産と云々 旧記云小代國言縣上の宮本酒を彦根大神

古今著聞集云

達深五年釣日志の五月金よ釣院の番長泰頼峯。脅生は武院洗う  
まつまつと小舟寄せゆけりが馬場ますて死ぬるを法皇寺  
をそ父頼武が御機あふ船をま先す反のみもとひそひと先づくれ  
ば利食ひそそりとひづきあふ又下人ももとてひれりでそせひひ  
てひづき冠乃むげくえまくとゆらぬと考へてかねどりがえば  
ぞうやつひづくれば妙下人が驚愕すと引ひくさびくまくらひ  
トタ風くそつとまく

其式りよへ古處の紀主て魏るかどりうもくみや今主と今日赤別  
神輿二基車社より七乘をとあの方ふ渡りある猿田彦神解説  
ありける生云子岡くられ候狀也其好きの寄  
三宮町ゆすく神體の式めり尔して示市場より舟便候川とつわ  
む社よを度りある生云子岡町より  
おきの盛る池うちのほとりへん

十五目

今宮祭 濡水紫野神 祭神 疾疫神  
一條院正暦五年長保二年世間静けさに神社を船丘のゆよ達ニテ  
御靈舎と仰がれ今宮と号ヒ

今月朔日幸社の神人生老子の町くみありと家毎の門に神と云ひ  
教くは祭祀より変形と云ふありて生老子の内三町組或ち三町組  
とて組合あらず幸くは數易て都幾の組町ふ南きれい方へう秀傳送作

生毛のわぬ鍔毛遡卷其名法密地和漢の寄附と繁毛六日の取扱

殊更燒燿と燒くよ海の珍味と異へ寂寞と  
爲くも御のぞく萬葉と呼せらるゝともは御至所也格別其則  
本の處の町へナシ有リと云ふ不思と幸也

が是に其敵難ある事  
七日朝の支那と曰く其仲間中の人々一様の帽と麻上下と號し  
拂の者上下と號し役立高く居て罰竹と號て是れを

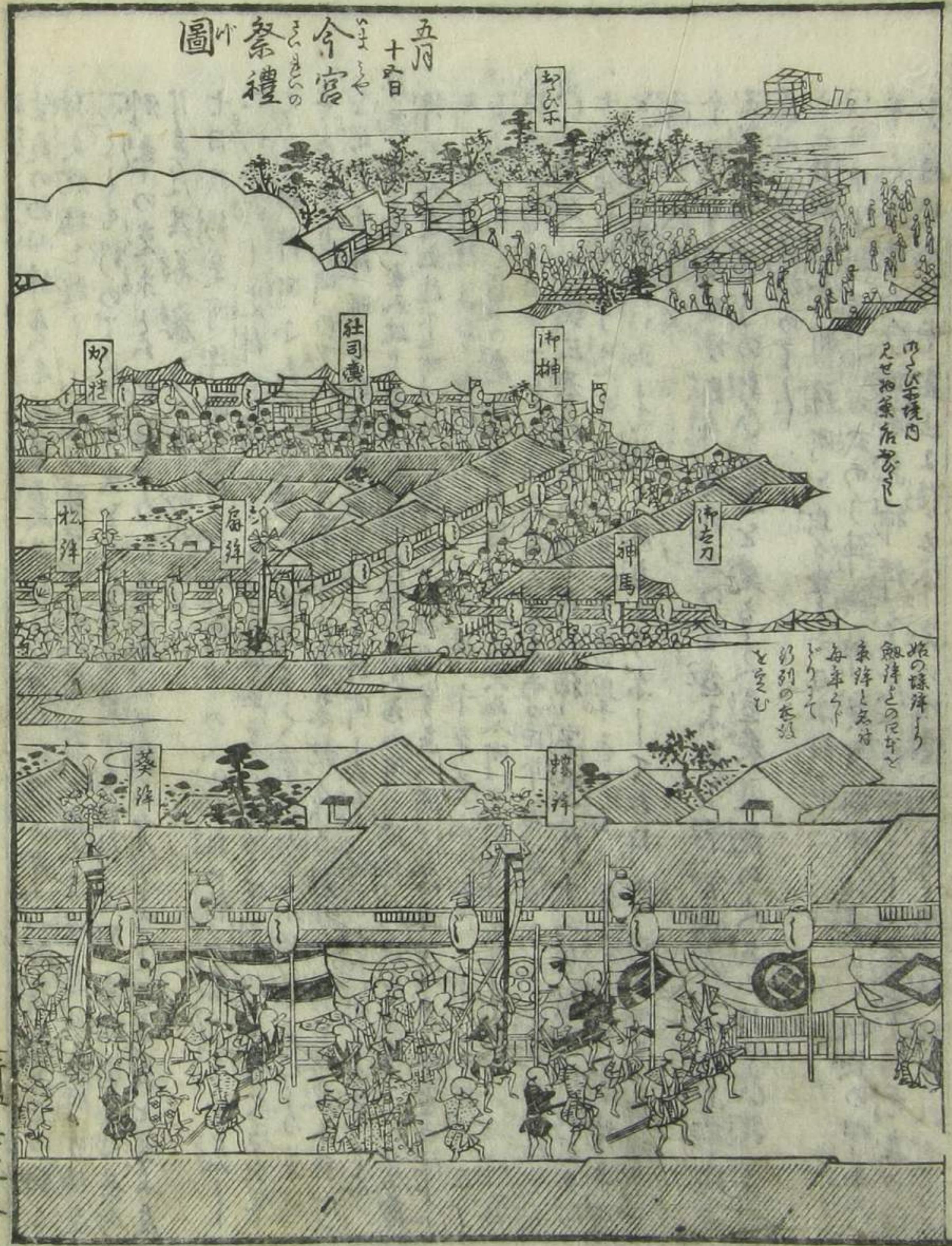
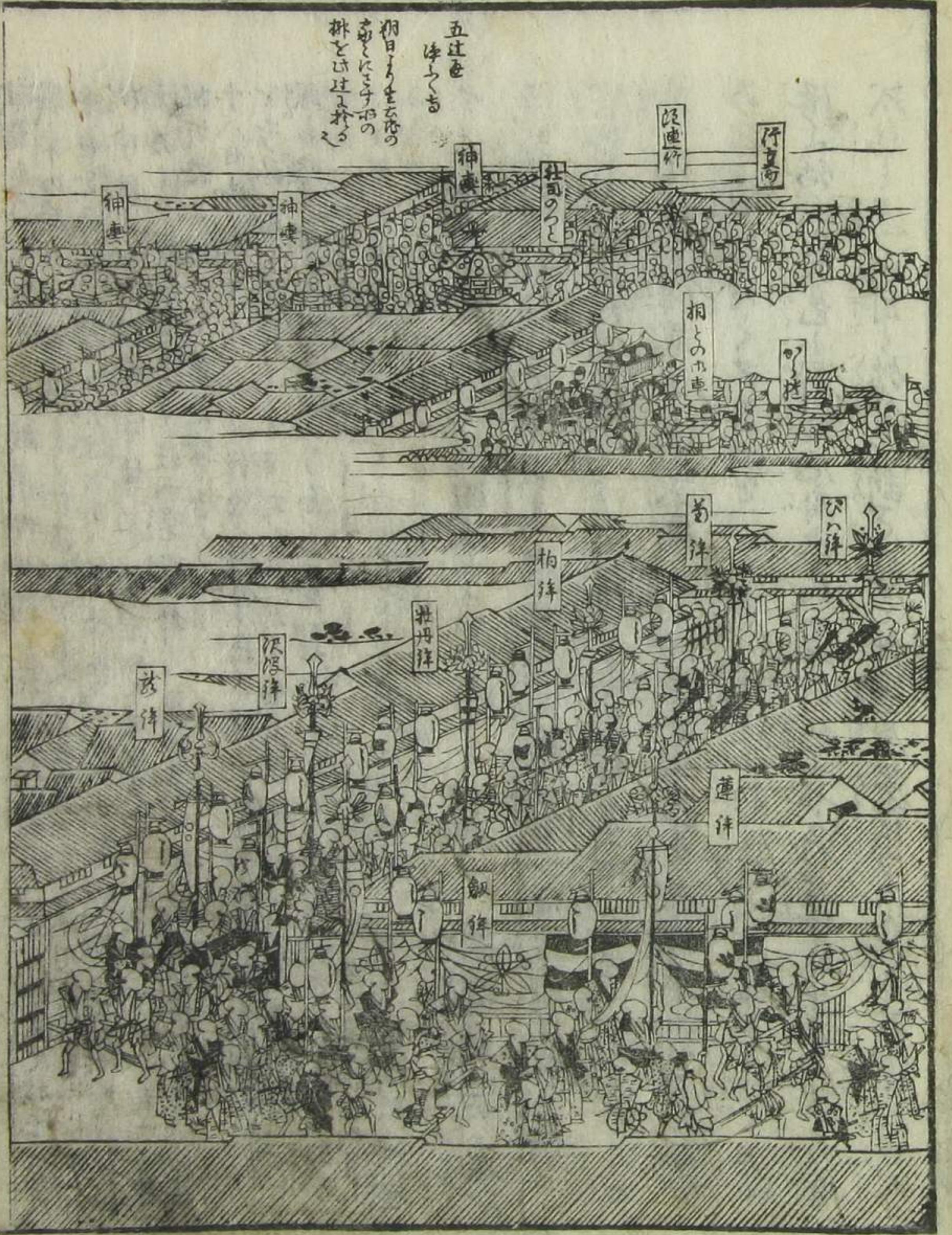
葛蒲  
葵辨。大文每入过上儿所。○細辨。又过大文而入所。○蓮辨。大文每五过  
辨。大文每五过下儿所。○鶯辨。五过在东入所。○次辨。千卒每五过下儿  
所。○牡丹辨。千卒每上立奏下儿所。○柏辨。千卒每上立奏下儿所。○批把  
辨。千卒

七度木の使ひ先を社より出で峯原とて大徳ある御和丘の小神幸み  
と車へ御旅所の焉モ暫く休息あり尔一て松井清定小物とて神事  
旅所へ御ゆ

今因まゝ篠山境内并梅外小の町急下道より原宿  
宿泊所。元々上等仕事の宿也。其の傍に  
後醍醐天皇の御所。楊弓の御ひ小屋と建つて、  
其の傍に遊記の人多ふ。其の西側に  
象山原タ涼の館也。

十五日朝行幸町と鳥居奉  
日未ト家刻還幸の式あり神  
樂神事客圖牛に妻  
相殿の神を御  
神事一祝云り  
へ鷹峯に毛穴の社

あり後世今の毛宿山は樓を今之の地を  
御子有余裕社と號す



是ううと云ふて還幸附御後まへ修支町七番の使方て御事とせん  
還幸の路次も嘉跡より安居院と南へ寺之内を東へ小川西と西へえせ  
通と西へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ又へ  
梅神酒あり社司事奉早元の又过を東へ大文を山へ舊不のあえの神  
舊案本社へ至幸那へ事る所も入しが神輿の奉渡ひ  
桃灯教多あつて甚足幸あり

十八日晴寒ちひ今日乃幸町奉社小緒ノ名詔者と勢乃社地小幕  
とおほ妻と僕と又今日近い桃灯と出久其伴風流の人形供給工手  
と作る花と付るもあり玉く更勧めを乞ひ又今日乃うおまく出る  
放哉成行うお詔文多一其中又ハ極老人もあつてさゆくの婆小門  
矣と傳乃幸京師の他小暮せば是は地の一風流もて例年うづだ神御  
小暮うりとて是と程度あれば經を多く候ひ亦たゞひ

宇治離宮參  
山城國守源みあう糸神三座應神天皇

小出うりとて是と程々あふはれむ多く旅ひあたぐひ  
宇治離宮參  
山城國守源小あつ衆神三座應神天皇  
免道尊仁德天皇永嘉年中岡向頼通公平等院の祐守  
一就玄藤原忠文を帰すと云忠文当承平年中平將門殺達の之  
節度使の大將軍として東國よト向ひ多よ藤原秀郷卒貞盛等ひと  
あらわ將門と號く其首級を献ど忠文本途由來く既不其族とす而  
淳よ歸ふ於是小野宮左府忠文をまの列ぶへらき徳く忠文除く左府  
不忠と逐不自飲食と歎く死を其靈屢夢其靈也（其靈と冥々）

た先ふじあよ保せあつとく  
其式參本と長さね足も切其小にれ望と被りしめ是と擱く瓦人をんぐと紅  
弓削道後を保せあつぐゑ其馬法小表にと不審の既うる御日令経  
の轍伏をもべ里宿是とどさんうりてえ充未別よう安已別み跡く御豆と能  
を是とを平沛神案くよ青梅苔の兩袖を神拂ふ拂  
甥天神祭 和泉國甥津戒町の東にあつ季神天滿宮  
右ノ塙定は塙村小あつて夏系祖神天穗日命大拂せ祭亦

日 永觀堂上人敍示  
天王寺金堂幸る密法 洛東のあ

法會も當寺中興同く寶盛和尚の忌より元盛又名窮情四條院仁宗幸中宮中坐て菩薩戒を受ける事しく三朝國師の號を賜り建長元年五月十九日寂に後源賴帝大悲苦處の號と號る

京師  
廿日  
今  
日  
國  
扇  
を  
多く  
持  
て  
御  
法  
事  
の  
考  
え  
持  
ち  
せ  
里  
宿  
泊  
雷  
陰  
の  
守  
へ  
祖  
園  
會  
吉  
壽  
入  
ま  
ま  
六  
月  
七  
日  
の  
象  
下  
に  
死  
と

十三日　因村麻呂忌  
法事済水寺より終りて从僧  
因村麻呂は左京主、苟田麻呂の子。三四位大參の跡。性勇略、以て  
身の長五尺、守胸の厚一尺五寸。目と鷹の如く、鬚も金縫紙編み。ま  
歎と手てを数えき二百七十引。壯もびだら松四行。目と想もびだら猛獸。腰とば  
く絶矢もれ、老も馴熟し。世傳くねん昆沙門の化身。うつて東夷とぞ付  
て功。河内弘仁二年五月逝去。年五十四。山城國宇治郡栗栖野下葬。圓通寺  
建。之の大桓那。すてふよひく今日法事を終  
○長寶寺七番頭長者式　振羽経吉郡平野ふあう  
因基は因村麿の女桓那。室號竊妃。すう天皇為ト。後大内年  
中。其前よ雲石あつて急か大姉を号し。因村堂。也將軍の像と安を御す  
慶豐卿の作。寺内。小屋居れ跡あつ。尚村小因村麿が家臣の家系。七家有

京師  
廿日

子孫相續く平地侍士とねり今小み生凡今日南寺小集うて遣去と  
うん是成七歳改長者儀式云是因村廢の祥忌法勅よりト士葬も土  
棺。末志。ニ上。过免す。

○西社禁  
近江玉瀬を移す後半にあ。南の義宮棲廬わい酒安の事  
神嘗二基あ。山門。悦喜寺坊也。あ社の主を。兩社の門送も中絶  
ありて。靈列庭。う。これ故。あくゆくと。

廿四日

○古都各彈誓忌  
山城園毛名郡久原郷す。

彈誓文も不知。也。青山。尾張。海船の人。きつた。案。げて。出家。す。も。ふ。林  
島。遠。水。岳。一。は。留。念。絵。の。外。絶。也。慶。長。十三。年。治。少。右。知。若。城。昇。劍。一。道。紀。を  
贈。る。度。長。十八。年。六。月。廿。日。寂。と。年。六。十二。

○幸國寺燈所幸殊義今日うち七日の向。左。別。燈。川。幸。寺。よ。あ。

○富士坂離今日六月二日未至  
山と駿河。浮至遠江。甲斐の國。下瀬村を社。  
駿河石井郡よあづ。駿河神社又富士権現と号す。久慈の安佐院。  
用那姫今馬坂と申名。上古用村よあづ。二國第一山の勅額と掲す。



居のものと至まらず傳云孝靈天皇五年達海王の地相湖水渟く日付  
富士山出現久云地主也史小見てび都良香富士紀云峯は  
刻きんぐ也くあくは筆と天日属と其のまに幸剛也て史籍を歷  
続きゆふ記もあはずすもあらまよもあわざが也とぞば記を一  
象ふ況す事也あくべ神代より雲霧勝脫くとて望てび孝靈帝  
五年晴くもつて初く山嶽もぬくらかう人

の山と富士山並みるを過りやま。又朝鮮人来傳のトル駿河  
にて富士山詣ては山城國小見ゆるとも日午未富士の形よ  
額雄耶ふる山あううけが御と云是と云テの富士と号し御舞  
より見るふも麿石たる富士うんを統じも破列の富士小野と云ひ  
うち凡ふ候。世は云富士の人穴立ひ。仁田少郎忠常ひ穴入そ神女よ  
と或人ほ元山入は走三十間を跨ぎて背も源ひひ立をめ  
ば寒き支煙中日立め。今の体中く人の形を死孫より見てぞ  
もくは穴の有玉人穴村と云ひ人ほ穴と曰神。んは地ち富士  
山三里。富士山の内ふ人穴ある也。あら  
方栗天地位り。神多びくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
の奈緋くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
の奈緋くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
雪素い持上け。うすく雪もねだり語う所をひづきゆん  
歸れ。北高船を

河内  
日下ヒホ山諸のきみと対ひてゆきの多和乃雲を育て  
其の子の世の文人連の俳諧の好士お秀作又竹取也傳  
ふ安士の文と號す今これと譽ん

晦月

武周神喪洗

清東にあり

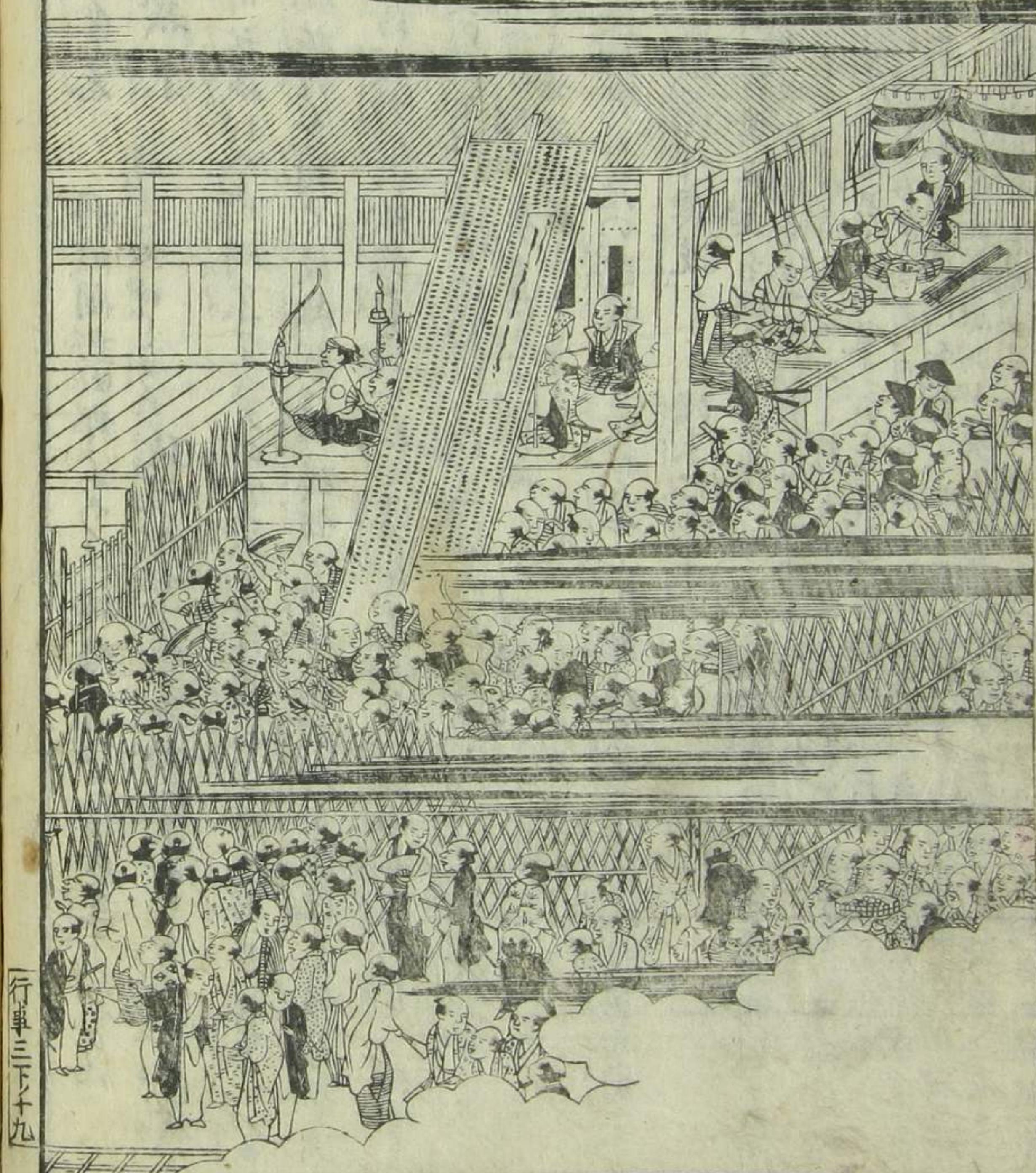
○大原志 丹波國春園郡 みあう 神傳三月廿二日之奉下にあらず  
曾我宗 胜名荒神と号す 駿河国富士郡安井村下あり 宗神尊我  
十郎秋成日五郎 時宗乞手の靈城坐す 建久四年五月廿八日父乃伊雲  
工孫詠經を討す後頼朝への旅館と確く秋成院より討死し 時宗坐る  
やうに頼朝に其徳恭勇眞贊と讃え靈龕とまでて神因若千、伏寄らるが今も  
君父の徳と稱ゆる由社より前まがひて感應ありとす 今日総人多  
國云 今日雨降りて世屋敷の雨となり、御成が走りぬけた城の虎姫の御を  
岸人ぞ碧浪を其哀念みゆづく 今日おこつても雨すとよ  
今秋は戸二度の劇場なる秋なりとて舞狂云ありと段初年芝居の如

佐吉門

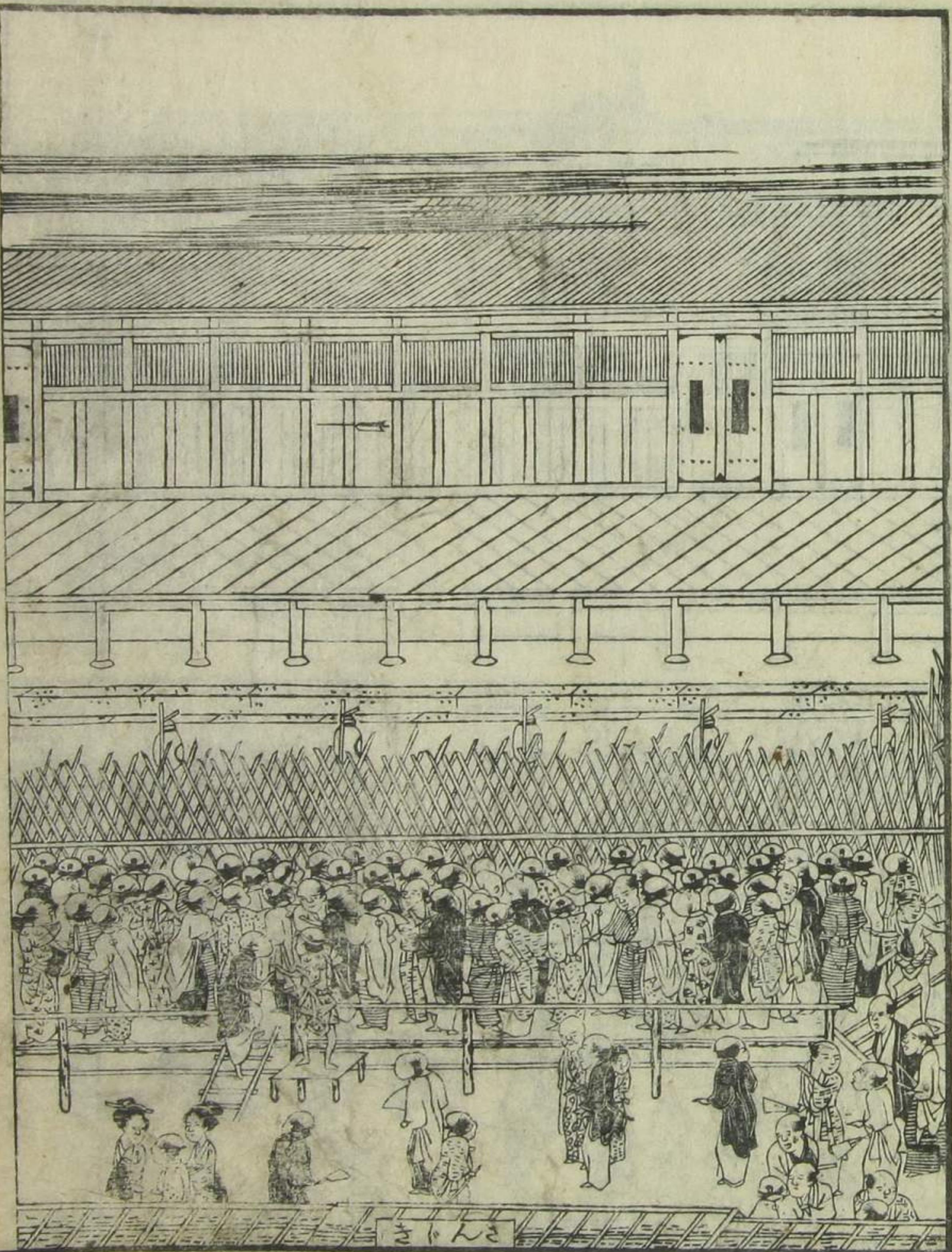
孫少翁之子也

治東  
圖川  
數辛  
大矢  
間堂  
之

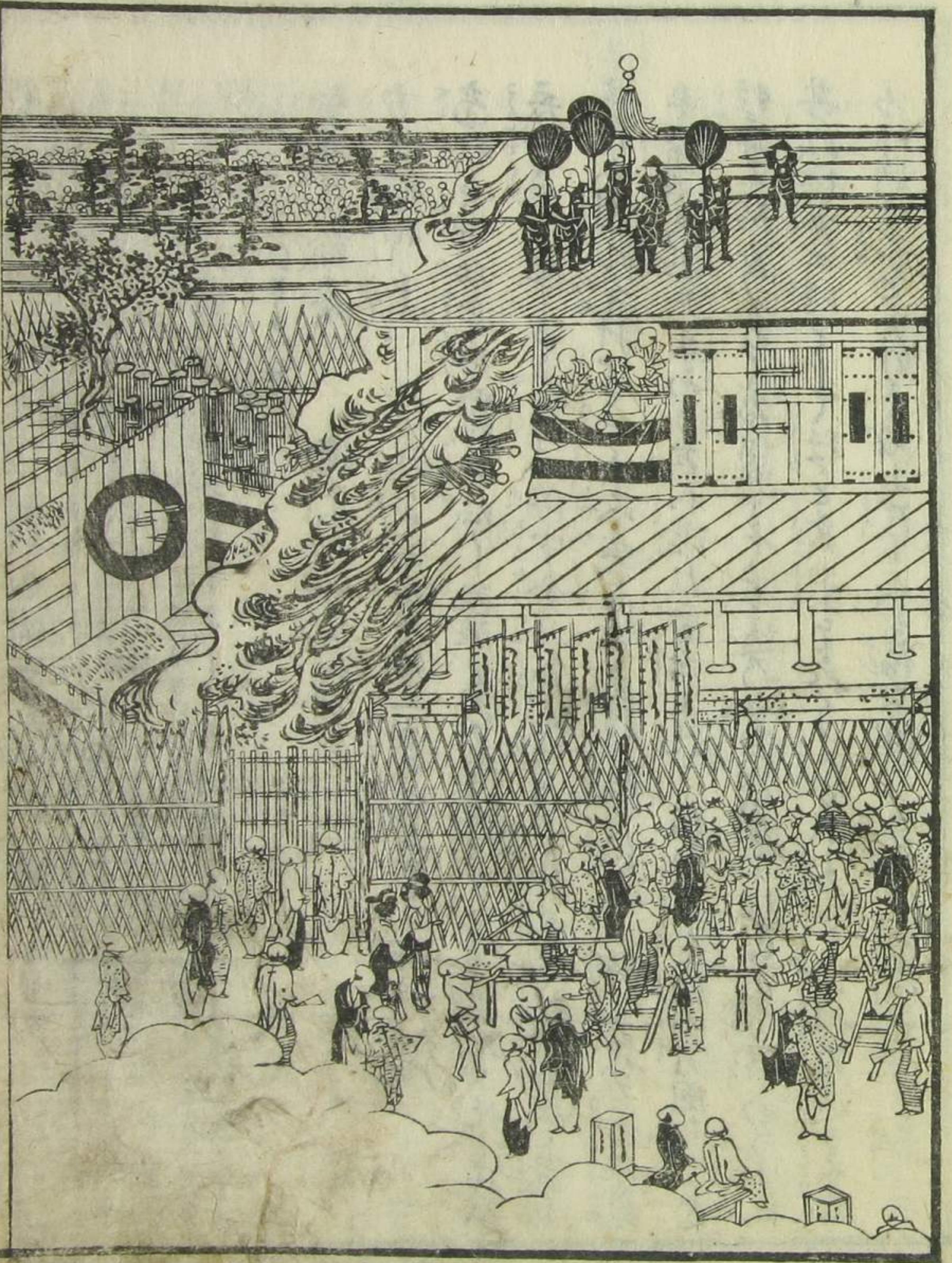
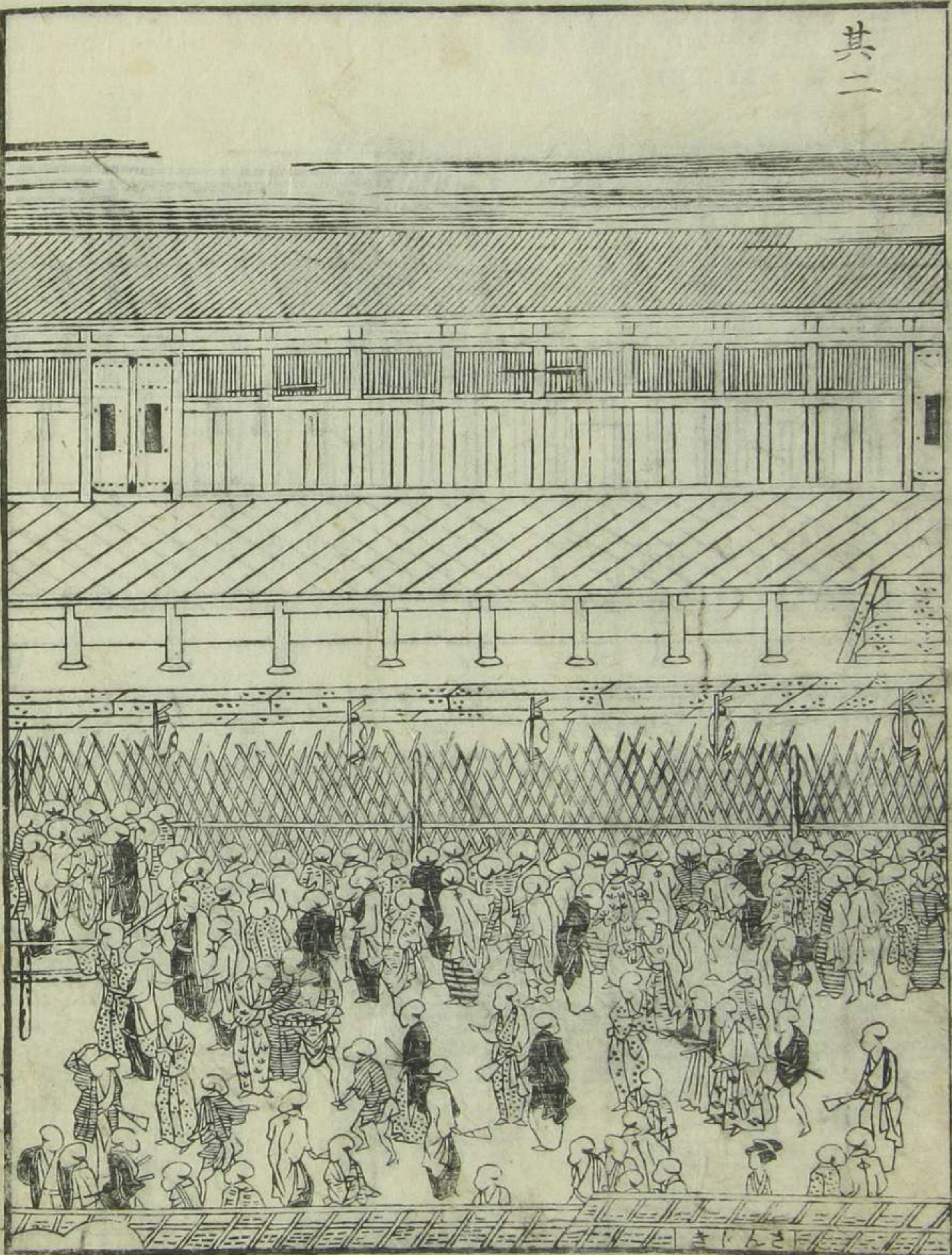
三十三



行事二下十九



其二



年々小刻り其夜も喝女鬼。保見。幫向。と尉ぐの時。發小遣風流  
の粉粧。一色。御墨を鉛筆。扇。附の東へ。おひそめ。あの方。纏。小  
歩く。武家町と東へ轂の下とあへ通う。鳥居。法事。あらの門より車  
よ入西の門を出。かへ新橋を西へ繩手。ま右町と東へ。まつてえの  
所。下り。みゆく。已う。象れ。彈。ふく。神祇見ひよて。其先。かく。まへあ。と。召  
くす地も宝前。ゆき。野集。た是小。よし。昭和法制。まきんが。おほ。まくの  
固。を。出。さる。東山の城。ひ

智積院論義

洛東大佛

方達明神集

いづみ  
和泉國傳の序 三書のはづかう

當社之神功皇后三韓之神凱陣之御之後經春之神宣后下凡一時  
吾和鬼子母天王大津の淳中念長岐ふ経倉一往來の私と觀人と言ふ  
あ種小國く今北墨の小文居と送至ニ神社の坂と野の下と其荒鬼  
毛を荒紫乃小戸もあつ其れ鬼丘宣后下凡一時ひく真原志の園たうそ  
佐志小治子とみんおひ附て方邊乃多花紙す往來よ門根あつて  
其故語意の地をみて社を建宗すまづらそりと送祀首途もる若  
ちひ跡の土をうけくねふほも又も様子持て方隅の多忙鬼子母と云ひ

21

寂秀集

元事蹟書玄永延帝一條寛ム

一  
條  
宣

あ社の別室向宗寺にて神舟を出人往去社御送船の附もけ社もま  
御送船あり

今日奈須の宗古の船とあててゆる是神功皇后ニ韓征伐の附主神地祇と勅詔  
五月晦日御凱陣の附は堪よ故て葦は繁に植とゆき方邊の綏とすよすら始むる

不定 ○ 寂勝講 元亨釋書玄永延帝 一條 宽弘六年六月十九日

院 積德を宮中に近く寂勝王經を傳説をかえ五日玄永先代あひ  
乃へあひ止む今より例へんとく公支根源玄永が棄て月と宣光  
られ西園の大寺れ 東大寺真極も傳説者の方をあひをえしもだや  
純義淳御陸后がどりう寂勝王經以清涼放逐を傳ぎゆくと  
顯絵 今より 云支根源玄永氏小原始より傳説へ玄京中  
の條里少齋とみて檢狀達使あつてこれを引く系譜の勤文あく幸  
ゆるがりうち内陣ふはまてあきくさじ被服する室の御宇もあけ

○是月東寺長者院七日開修法事

○是月禁裏より拂音會と院中親王宮門徒攝家小遊せしも又女中ふまも下御山

○是月

香具松藤井播磨初成を

禁裏院中及す貴の家よ歎だ

○是月

南都春日の社家園麻城

禁裏院中及す貴の家よ歎だ

○徳雨

立春の後百二十五日大祭雨あり是と五月雨或と梅雨と云ふ

○万地熱一漬の後すくは筋陸地訪く水涌出是故は毎元と云ふ

○捨民夫田沼舟生山田の左原野村并木文の御社地每年又水雨を期を

懸念を是と梅雨井より雲粟を傍つと云ふ者世云小水川

京作木文通年間あ中立穀もあひぬ多めよあり者あり泉町とよば泉町の

池あ無く泉町井小馬頭人家の裏より井あり常は約瓶をりて汲む極めて

候少く水井肩より以上漫れき山あ處の溝小渠を出川を流冷氣り梅雨多

ともちあ減トてえのゆゑに汲水は甚と泉町と号してまた機附と云ふ水を

○四植  
○四月入梅の候より半夏生を引くに苗を早苗と云苗と抜を

○不苗取と云桂女を早乙女と云農家の男女混雜一故と蜀して載を

○又中國よりも其女あらむ若枝を打毛と称小あらむ拘子取桂女を是

○古之場の早乙女抱子小糸トてよれ早にみも遅き者も一洞小孫人物を

○手吸うりと云又は月

○禁裏

○仙洞の御田植あり日を定め早

○行事三月元二

ヨシタ

○乙女は拂衣の農家もと來方

○卅二回堂丈丈數

○洛東大佛

○有ア日定メバ又例年有ア小る所ノハ真

○人あま六隣附小云れと新ひ年もあ度も再びの支ア又日矣教子

○射半晝木あう又復は月再びに矢教の盜觴も保元年中新興壁の別商

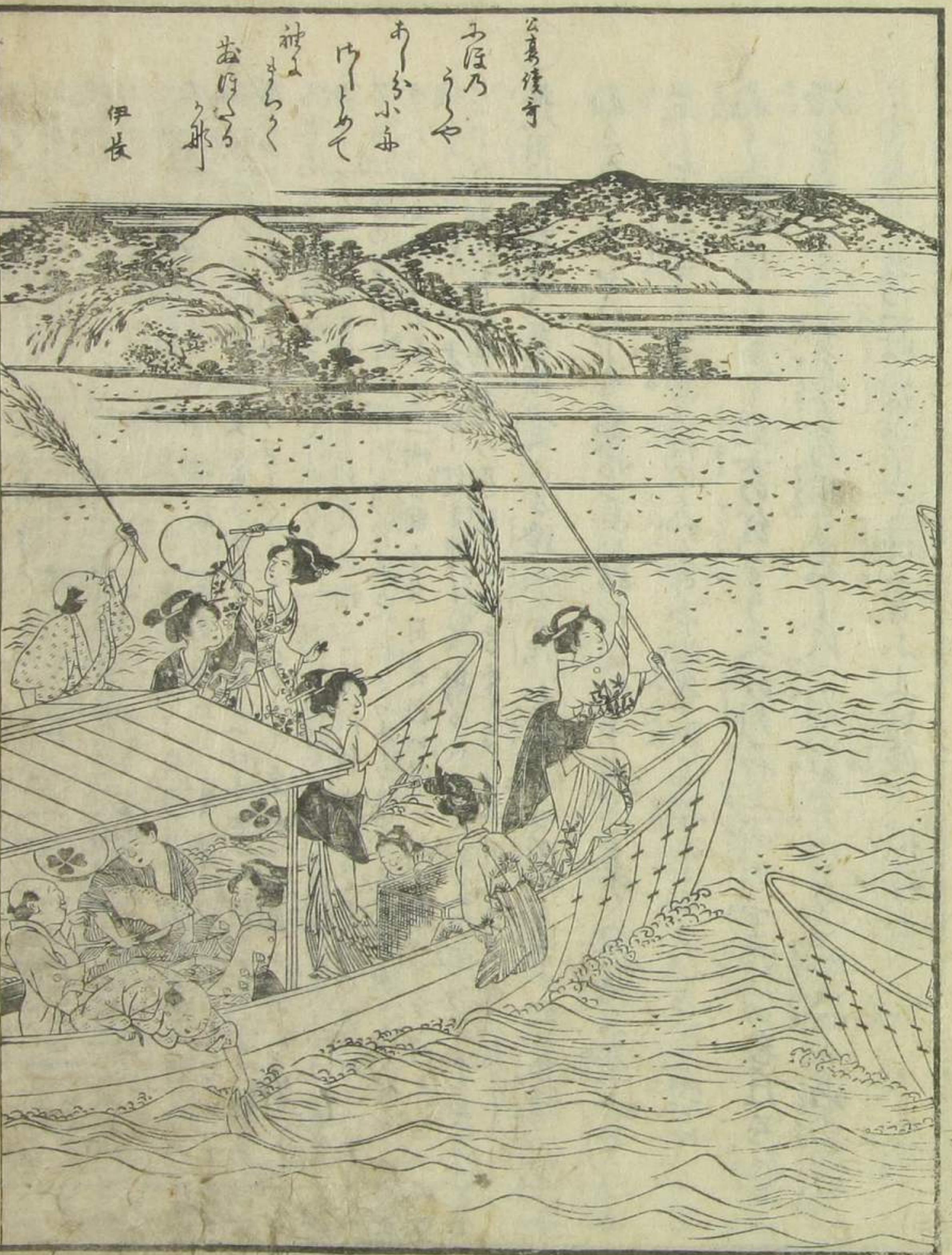
○櫻塙と云ふ人八坂青塙の的場より歸るさばき事小体ノヘ射候

○其後世々の達人多く弓勢を試む新中寛文九年五月二日尾列御店里習

○勘定簿通支八牛半と射る其後貞享三年四月廿七日紀列御店和佐太八郎

○通支八牛ニ格ニサ伏射く其名最る

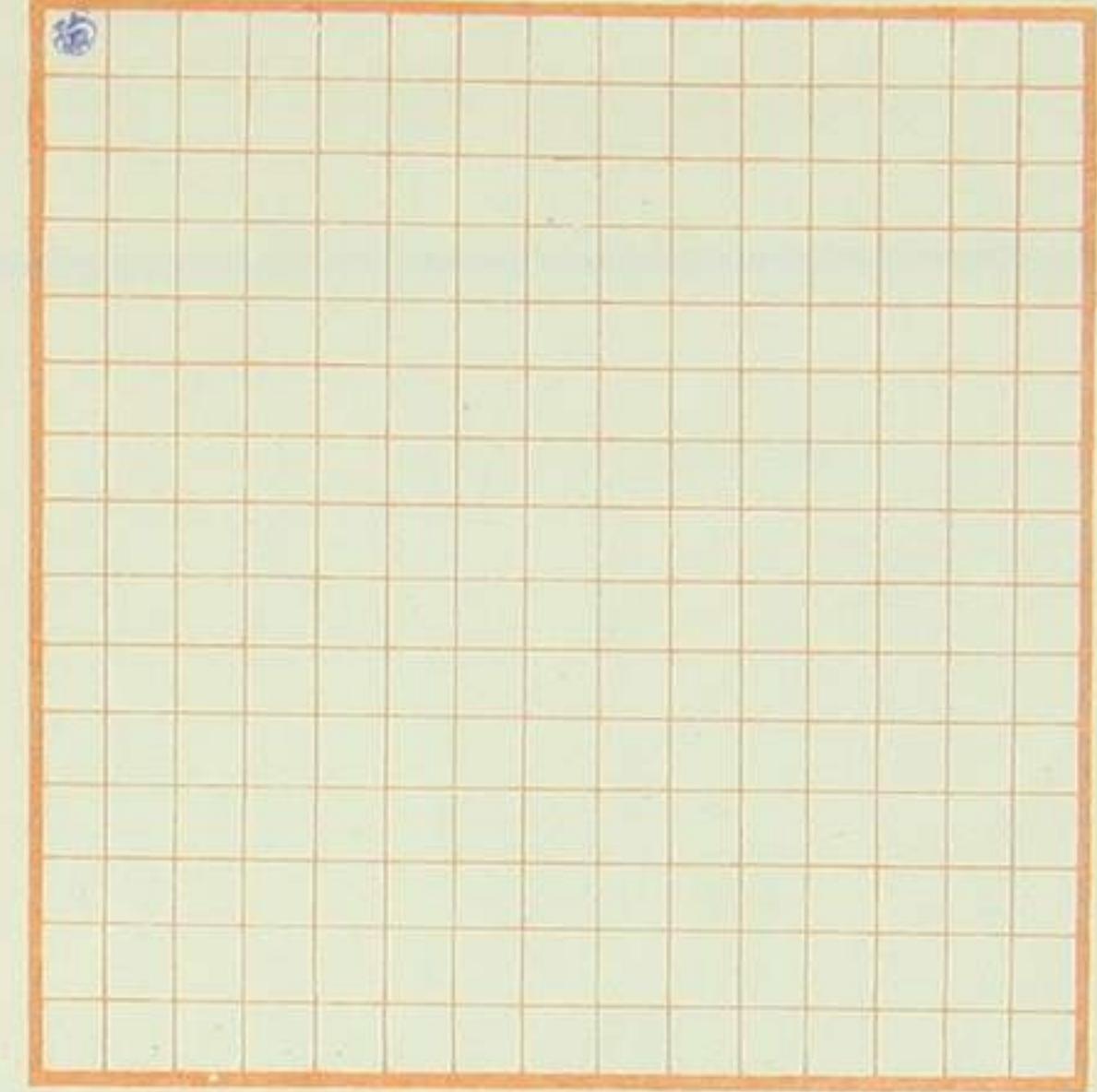
○其御堂背懸上奥の傍水堂より向て射るきの長ナ有小六格に間を足ハす  
○小の階梯上より八尺许の構とづたは上不役人二人並びく一人より金沼小木奈  
○用丸と画モ一扇とねぐらうすと矢の事ア毎より束うく空射もく御矢の  
○枝と算より二人より射塵とよりく通支御水と塵と標と通支の統と水山段ニ  
○人あら一人より足掛り方角ドキおきおき板に百半ナテ道至千五百本小木奈百半  
○の間右金沼の塵と標と通支の統と水山段と塵と標と通支の統と水山段ニ  
○小懸又通支八牛半と紀一て射深の御小矢を小半ナテ道至千五百本小木奈百半  
○矢の事ア有りてあ鐵みくさく後至丈许の圓と画一幕と弦の是脚的  
○又射手の側本力大なる事く並居へて放射每よりワアと喰と仰り射手と仰き  
○見物のふも曰く喰を發く既居へて放射每よりワアと喰と仰り射手と仰き



拘くらむと於ては内侍の方より見ゆる人の中へ便箋扇子をよじりて移す  
事の後にて太鼓と焼き芋の盛りと大漬物の去来多ようあり  
候者ひくに多くあるが、其の行脚をめぐらし其の間中  
思あうる庶民のまへけるの塵よ庵とほひ或ひ太閤と道と者是ふや  
て身強をねまへて射手体直の間矢取の列車櫻とくに陣と號一十人  
許射探の矢と技取矢等小納先これとくげの堂の本音と白う射箭と宣  
表も弓張桃井をまげヨイととけ變して走る体直と相を擧てお手と  
うな自然射探と趙くそれと矢と弓の格闘とあら林木と廢除しれ  
却ては東京の薦した支云宿を絶て御行は公侯の干城と又  
不もはるの有松とや渭川を北に大矢教とよる射箭と射箭  
苦六ツ付少ゆる至表十二付の間より日矣教の始六付より月六付と至六付の  
間より家書とは書の中御小字にて射箭三十間筋めをえり是  
ち十八歳以下の児童の弓箭と体弓半弓其体の大矢教不日  
この事くわざき是月水鷺帰是城書さる路人奉節も是時白川の魚小立其傳説で小  
町もあ家やども是傳意の路經近止すれど多くは地主屋と云ふ  
見とて英學の聖經の本色が出生年紀年鑑あるひも圓扇とて  
扇とて草紙の多く呪文の紙たり又は列石と城列宇治川の番庄甚れ其  
勝とて大さく幾千方乃指もとべ一園の番庄のとて那瀬り水面に施  
すま盛夏の一壯觀すくて涼宵小舟泛波く彼侯翁遊小うへて空席

川の流れる所とあると石と竹脚の附小舟はあらぬ月うるわしくと山間を  
周と廻りに壁の丸に盈をめぐらし船と叩く琴三絃は拍子と和  
は上方活風を碎を破りてのぼり解経歌の差しとよ聞き歌く一曲の方  
あはせに既よ東方の白と小舟の船と船の岸と舟と白と室と  
船を捉くとぞくとあととまと船と壁と壁と蟹身と船せよ船と  
アとすとゆくと御宇宿の壁と頬波が靈魂化して壁とからず然をるんとひ  
仰ふさんと歌の壁は折れて靈との名もすとだましもある今世までと壁と  
かうて現のまよもと其しと今は是とて是とて是とて是とて是と  
いとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
族哉の靈うりやうりがれまへりとよしとよしとよしとよしと  
いとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
よしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
よしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
ねのじとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと

4 年 10 月



よ生ん大きのあはれのまごとくえはるとはば虫の雪ふる  
火事の義うきよを或人のゆき

諸國年中行事大成卷三下終

お生ん太異のあは大父のまよをえきるとには虫の身みを  
火やかすれ義ぎきりとぞ或人の爲ためつき

諸國年中行事大成卷三下終

